NARUTO 転生物語

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮＡＲＵＴＯ　転生物語

【Ｎコード】
Ｎ３６０７Ｋ

【作者名】
ゆう

【あらすじ】
ある日起きたらＮＡＲＵＴＯの世界に来てしまった少年の物語です。
ご都合主義の原作崩壊アリの自己満モノです。
初めて書いてみました。
なので下手なのでそこらへんはよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

文才無いですが頑張ります。

プロローグ

ゴォォォン！！ゴォォォン！！

…ん？

何か周りがうるさいな…

……は……？……え？何これ？

俺寝てたはずだよな…？

「ごめんね……ナルト」

誰この人？

何で俺抱かれてるの？え？

『あう～あ～あ～』

あれ？喋れない？え？何で？

何あのでっかいの？てかここどこ？

「ふふ…起きたんだ。僕はもうダメみたいだ…さよならナルト。元気でね…」

【二重四象封印】

グオォォォォ！！！

シュウゥゥ…ぐっ！何だ！？腹に何か……入って…きた？

『オギャァ！オギャァ！』

痛い痛い痛い！！何だよいきなり…ぐぅ！

あ～痛かった。さっきのいったい何なんだよ！最悪だ！！

……ってこれからどうなんの俺？

プロローグ（後書き）

ちょっとだけですがなんか疲れました。

次も頑張って書いていきます！

キャラプロフィール

うずまきナルト（男）

家で寝ていたはずが起きたらＮＡＲＵＴＯの世界にのナルトになっていた青年。
興味の無いことには無関心、最初は混乱していたが現実を受け入れて楽しく過ごそうと決めた。

性格　好奇心旺盛　必要の無いことには無関心　楽しかったらそれでよく普段は冷静

趣味　読書　修行　悪戯

将来の夢　　のんびり好きなことをして暮らすこと

容姿　金髪（四代目くらいだが後ろは長くイタチみたいに結んでいる）
普段は蒼い目をしているが妖魔のチャクラを使うときは紅い獣の目をしている。
写輪眼を使えるがバレたらまずいと思い形を変えるように訓練したところ、巴模様が消えて目の全て紅くなるようになった。
訓練で異端の万華鏡写輪眼が使えるようになって（最も親しい人の死を経験すること、ナルトの場合は父親の四代目の死）目の模様が変化した。
万華鏡写輪眼を使っているときは真紅の目の中心が星のように光って見え全ての能力が上がる。（反動でかなり疲れる、異端なので視力は下がらない）

異端になった原因は玉藻と契約して体が妖魔に近づいたから。

得意忍術　基本的に大抵の術は使える。
普段使うのは医療忍術、螺旋丸、影分身、火遁、風遁、刀を使ったオリジナル忍術

愛刀は【蛍火】全長１５０？　先の１１０は刃で尻に２５？の刃が出ている珍しい刀

ナルトはすでに火影よりは強いが玉藻には勝てない。
玉藻はこの作中で最強ということにします

第一話（前書き）

修正しました。

書いてると時間過ぎるの早いですね。

第一話

こんにちわ！
俺はうずまきナルト！四歳だ！何かいきなりあのＮＡＲＵＴＯの主人公になってたんだ。
最初は混乱しまくってただけど……まぁどうしようもないし忍術とか使ってみたかったから現実を受け入れることにしたんだ。
でも良いことなんてそれだけで余計なことばっかりなんだよな～

『はぁ～』

「どうしたんじゃ？ナルト」

『何にもないよー爺ちゃん』

俺は今火影の爺ちゃんの部屋のソファーに寝転がって巻物を読んでいる。じいちゃんは書類に埋もれて仕事をしている。

「ナルト、何を読んでおるんじゃ？」

『んーとね今は風遁の巻物を読んでるよ』
「……もうそんなもん読んでおるのか？」
『うん面白いよ爺ちゃん』

そう、この世界に来てからずっとする事の無かった俺は教科書とか基本の巻物を読みまくっている。興味のあることの勉強は本当に楽しい
ちょっとした時間に爺ちゃんとか暗部の俺を九尾と見ない数人の人

に教えてもらったりして木登りとかチャクラコントロールの練習の仕方とか聞いたりして頑張って木登りとか水上歩行とかはもう普通にできるようになった！
最初はチャクラを感じられなかったが元々無かったものが今は有るので二日でわかるようになったが精神はそのままプラスされているので精神エネルギーと身体エネルギーを調節するのに苦労した。

「そ、そうか…今日は外に行って遊んで来ぬのか？」

『うん今日は行かないよ？』

「まぁいいかの…それなら待っておれ」

全く、ナルトは子供らしくないのぅ
生まれてからあんまり外にも行かんと儂に付いて来てずっと本ばかり読んでばっかりじゃ
儂を除けばイビキやゲンマ、アンコ、ハヤテと濃い連中としか仲良くしとらんからのぅ

「はぁ～」

『どうしたの爺ちゃん？』

「何でもないぞ、ナルト」

『？』
この世界に来てから五年経った
相変わらず遊んだりせずに巻物を読んだりチャクラコントロールの修行、爺ちゃんやイビキ達しか話したりしてなかったナルトだが今

日は予想外の人？と出会った。

『んーやっぱり影分身は便利だね』

俺は一人で何回も頷いて影分身１０人にそれぞれ勉強させたり修行させたりしていた。今まで巻物を禁書以外は殆ど覚えたので術を試すのは楽しんでやっていた。ちなみに影分身は爺ちゃんにしつこくせがんだら見せてくれたので使える。

それで自分は医療忍術の練習をしている。影分身でやっても今の自分でやったら消えてしまいそうだったからだ。影分身を１００人に増やして小さな傷を自分で付けて維持と治療の修行だ。チャクラコントロールをずっと繰り返してやっていたので螺旋丸もできるようになったから医療忍術もできるチャクラコントロールは身に着けたと思う。

九尾のチャクラがあるから何回も傷つけないといけないので一週間も続けていたら手のひらにクナイを貫通させるのも何とか慣れたし前の世界の人体の構成とかはこっちよりも進んでいるので傷の治りは九尾の再生力も合わさって貫通させた手のひらも一瞬で治るようになった。

『……これはやりすぎだ』

良いこと何だけどこれはダメだろ！？

……傷がすぐ治るんだからこれでいいか。それに前の世界の医療技術のほうが進んでたし、その分こっちの人より鮮明にイメージ出来るからだろうし。やっぱ知識はどれだけあっても困らないな。

バタッ

『あー疲れた。地面が冷たくて気持ちいいな……はぁ眠い』スースースー…

ピチャ
オオォォォ！！
……ん？

『冷たいしうるさい……どこだここ？』

『この声はあいつか……』バシャバシャ

《小僧、こんなところまで何しに来たのじゃ？》

……やっぱでかいな…これが尾獣の中で最強の妖魔【九尾】か。

『ああ、修行してたら疲れて寝てしまってな。気がついたらここにいて、お前の声が聞こえたからな、腹の中に居るのに会ったこと無かっただろ？挨拶もかねてだよ』

《……フム…怯えんのじゃな》

『まぁ普通の子供じゃないしな、うん。なぁ名前教えてくれないか？俺はナルトでいいぞ』

《儂の名は玉藻じゃ。ナルト》

『そうか。よろしくな、玉藻。ニコッ』

《…あぁ／／》

小僧、ナルトの中から見ていたがやはり普通の子供ではないようじゃな。遊びもせず本を読み修行ばっかりしておったからの。

《…ナルト、おぬしは何者なのじゃ？それに憎い血を感じるのじゃが……》

『俺か？……難しいな…本当は二十二歳なんだが玉藻が俺に封印される前に目が覚めたら赤ん坊になっていたんだ。何故こうなっているのかはずっと分からないんだが。それに憎い血って何だ？』

玉藻が憎いと言うのは里の忍びかうちは一族しか考えられないが…

《…あの眼と同じうちはの血を感じるのじゃ》

『なっ！？本当か！？原作ではうちはの血なんて流れて無かったはずだ……この世界は違うのか？』

《本当じゃ。原作？何じゃそれは、この世界？》

『あっ…まぁいいか。俺はここと違う世界で暮らしていた普通の青年なんだが、そこにこの世界のことが書かれた漫画があってな。それでは俺はうちはの血筋なんかじゃないんだ』

《……そんなものがあるのか？》

まぁさすがに信じられないか

『ハハッ…まぁしかたがないが本当のことだ。そのうち分かるさ。

っとそれと少し待ってくれ』

俺にうちはの血が流れているとはめちゃくちゃ嬉しい。写輪眼とか使ってみたかったし、早速試してみよう。取りあえず眼にチャクラを集中してみるか。

『んー……なぁ玉藻、俺の眼なんか変わってるか？』

《？何しておっ！！？ナ、ナルト！その眼は！？》

おっ！？玉藻があんなに吃驚してるってことはできてんのか？

『なぁ玉藻！？写輪眼できてるか？』

《はぁ～しっかり三つ巴の写輪眼になっておるぞ》

全く、めちゃくちゃな奴じゃなナルトは……はぁ～『ふーっまぁできてるんだからいいか』

まさか本当にできるとは…ハハッこれで修行もはかどるし良いことだらけだな。

それより玉藻に聞きたいことあるし聞いてみるかな？

『なぁー玉藻。人間の姿ってなれるか？』

《なれるぞ？》ボンッ

『……予想以上に美人だな／／』

煙が晴れて出てきたのは高級そうな黒い着物を着た金色の髪と瞳をしたかなりスタイルの良い二十代前半の若い女だった。

《そ、そうかの？／／》

『あぁ／／それより玉藻、お前は外に出たくないのか？』

照れる玉藻にナルトも照れ臭くなってきたので他の話を振る。

《出てるには出れるのじゃがな…どうせする事なんぞないのでな。ナルトの中から外を見ていたほうが暇潰しにはなるからの》

何か自分の中から見られるのって恥ずかしいというか俺プライバシーとか無いんじゃ……

『じゃあさ、外に人間の姿で出て一緒に森に住まないか？ずっと中に居たってつまらないだろ？』

（はっきり言って俺が玉藻と一緒に住んで修行相手とかになって欲しいからだが。）

『ダメか？』

《ふむ。それ別によいのじゃが、儂と契約せぬか？》

『契約？口寄せの契約か？』

《まぁ似たようなものじゃ。人じゃなくなるかもしれんがのう》

……まぁ今更だな。

『そんなのすでに気にしないぞ？何かするのか？』

何を今更という感じのナルトに笑みを浮かべた玉藻が近づいていく。

『どうしんっ！？／／っんんー！？』

急に玉藻にキスされたナルトが赤面していると唇を噛まれて血が出ていると玉藻が少し顔を赤くして離れた。

《んっ／／これで契約は完了じゃ》

『やるなら先に言ってくれ／／ん？……何か変わったか？』

《ふむ…やはり変わったか。ナルト、お主は人と妖魔が混じった者になったのじゃ。まぁ人間にはわからんだろうがのう》

ふふふ…ナルトがこれからどうなっていくのか楽しみじゃ。

自分の体を不思議そうに見るナルトに内心笑いながら軽く言う玉藻。

『はぁ～人間離れしてるのは分かっていたが実際になるとなぁ。……まぁ人柱力とそんな大差ないからいいか』

少し落ち込んでいたくせに自分の事をかえりみて別に良いかと納得して頷く。

『まぁ取りあえずする事は終わったしそろそろ戻るか。……玉藻は俺が一人暮らし始めてから出てきてもらおうと思ってるんだがいいか？』

帰ろうとして少し考えてからナルトが玉藻に言う。

《むぅ…まぁべつにそれで良いぞ。中からナルトと話すぐらいはで

きるからの》

少しむくれたように言う玉藻にキャラが変わったとか可愛いとか思ったナルトは少し顔を赤くして爺ちゃんに一人暮らしを許してもらおうと決めた。

『あぁわかった／／ごめんな、すぐ一人暮らしして出してやるから一緒に暮らそうな！玉藻ニコッ』

ナルトの子供っぽい笑顔に顔を赤くして焦ったように玉藻が言う。

《そ、そうじゃな／／待っておるぞナルト》

『じゃあ、またな玉藻』

そのあとナルトは早速爺ちゃんのところにいって強引に許可をもぎ取るのを数人の暗部が見ていたとか。

第二話（前書き）

感想有り難う御座います。

頑張って更新していきたいと思います。

第二話

玉藻と一緒に暮らし始めてから五年経ち俺は十一歳になった。
爺ちゃんに言いに行ってから二年間はずっと修行ばっかりして、もう爺ちゃんにも負けないくらいに強くなった。
それでも玉藻には勝てないが……
強くなるのが玉藻と一緒に暮らす条件だったからだ。それからはたまにAかBランクの任務を手伝ったりして金を稼いで玉藻と生活していた。
もちろんそんなに俺が強くなっているのは玉藻と爺ちゃんしか知らない。里の奴等とか忍びの連中に知られたら危険だ！とか言ってくるだけだろうからな。本当に面倒な奴等だ！

『はぁ～』
考えてたら溜め息が出てきた。
《ん？どうしたんじゃナルト》
儂が新聞を読んでいると影分身達に修行させてソファに座っているナルトが溜め息をつきおった。

『いや、爺ちゃんに俺らのことを少し話した時のこと思い出しただけだよ』

そんなナルトを見てあの時のことを思い出して玉藻は苦笑いする。

《子供があんな事は普通は出来ないじゃろ？まぁあの時の爺は面白かったしのう》
ポカンとした顔から段々ナルトならやりかねんと呆れて溜め息を吐く爺が脳裏に浮かんでくる。儂もナルトには溜め息しか出ぬな……

『まぁあれはしょうがないだろ？強くなんなきゃ生きていけねぇし。でも今年からアカデミー行かなきゃいけないからなー。俺はもうちょっとゆっくり生活したかったんだけどな。』
そう、もうすぐ死亡プラグ満載の原作開始だ。本当なら三回も留年しなきゃいけないんだが俺は面倒だから行かなかったんだ。まぁ一応成績はドベにするつもりだが。

《もう十分じゃろ？》

めんどくさがりなナルトに玉藻が呆れた様子で言ってきた。

『これからずっと大変なんだよ。そんなことより玉藻はどうするんだ？』

《儂はナルトが家を出るときは中に入って見ているつもりじゃ。》

『いいなぁ、ズルいぞ玉藻。まぁ面倒なときは影分身に授業受けさせればいいか』

《……》

初めからサボる気なナルトにもう言葉も出ない玉藻。

《…そうじゃ。ところでナルト、何で今年からなんじゃ？》

不思議そうに聞いてくる玉藻にナルトが答えた。

『あぁ、今年卒業する名家や旧家のガキが多くてな。そいつらの護衛だよ。そろそろ行かなきゃな。玉藻はどうする？』

《ふむ、じゃあ儂はナルトの中に入っておるぞ》

そう言って玉藻はナルトの中に入っていき、ナルトは爺ちゃんのいる火影邸に行った。

『来たぞ爺ちゃん！』ガチャ

仕事をしているとナルトが窓から入ってきた。

「ナルト、いい加減ドアから入ってこれんのか？全く、今日からアカデミーにいって護衛の任務頼んじゃぞ。」

強さは問題ないのじゃが、心配だのう。

『うん。護衛はそんな気を配らないでも大丈夫だと思うし。まぁ適当にやっとくよ。それじゃあ行ってくる！』ガタン

ナルトが爺ちゃんに軽く返して出て行った

ナルトがアカデミーに入学してから時間がたち明日が卒業試験の日だ。

ナルトは入学して以来ずっと授業は聞かずに寝ていたり抜け出して教師たちで遊んでいた。そして友達になったシカマルやチョウジ、キバたちと共にアカデミー史上最悪の問題児集団と呼ばれるようになり、今日は一人で抜け出して火影の顔岩に落書きしていた。

「コラー！！また悪戯ばっかりしやがって！！」「毎日毎日いい加

滅にしろ！」「なんちゅー罰当たりな！」
里の人々がナルトに怒鳴る。しかしナルトは……

『うるせーなー。アハハ！玉藻、落書きってこんな面白かったんだな』

ナルトが体内にいる玉藻に笑いかけ玉藻が呆れながらナルトに忠告する。

《それはいいのじゃがそろそろ爺どもがくるぞ？》

「おーおー！やってくれとるのぉあのバカ！」
呼ばれてきた爺ちゃんがナルトがしていることに溜め息を吐く。
（まったくナルトの奴、昔に比べて元気になったと思ったらここまで元気にならんでもいいじゃろうが。儂のことも考えて欲しいわい。）

「ん？」「三代目申し訳ありません！」「お！イルカか…」

ナルトを追いかけてきたイルカが寄ってきて大きく息を吸い込む。

「何やってんだ授業中だぞ！早く降りてこい！バカものー！！！」

イルカの怒声にナルトがびっくりする。

『やべ！もう来たのかよイルカ先生。』

イルカに教室まで連れてこられたナルトは縛られて説教されていた。

「明日は、忍者学校の卒業試験だぞ！！お前は成績が悪いんだから外で悪戯してる場合じゃないだろバカヤロー！！」

イルカの説教なんて聞き流していたナルトは普通に言い返す。

『はいはい。授業なんてつまんないし、っていうか先生って縛るの好きなの？変態さん？』

プチッ！

「今日の授業は変化の術の復習テストだ全員並べー！！！先生そっくりに化けること！！」

「「「「「えーーー！！！」」」」」

「次！うずまきナルト」

『はいはい』

（あーつまんねえな）《しっかりやるのじゃぞナルト》（まぁ一応やるよ玉藻）

やる気のない返事をして頭の中で玉藻と会話するナルト。

『…影分身、変化』ボンッ

煙から出てきたのはスタイル抜群の五人の裸の美女だった。五人の内四人がイルカにしなだれかかり正面にいたイルカと同じ鼻に傷がついていた一人が口を開いた。

『うふふ…どうかしらイルカ先生。ちゃんと女のイルカ先生にちゃんと化けたわよ？』

ブー！！

イルカが鼻血を吹き出し教室の生徒が唖然とする。

『アハハ！！先生大丈夫か？』《はぁ～》

一人笑っているナルトに玉藻が溜め息を吐いているとイルカが起き上がって怒鳴る。

「この大バカものー！！！勝手にくだらん術を作るなっ！！！それに何でいつもできないとか言っている分身が五人もできているんだー！！」

『真面目にやってないからな』

ナルトが胸を張って言う。

「威張るなっ！！！」

あれからこってり怒られたナルトは落書きをきれいにする罰をもらい顔岩のところまで連れてこられていた。

『はぁ～、めんどくさいな』

やる気なさそうにしているナルトにイルカがまた怒鳴る。

『はいはい』

【水遁　水流しの術】バシャァァ

「なっ！？」

ナルトが印を結んでいるのをイルカが驚いているとナルトがいきなり口から大量の水を吹き出し落書きされた顔岩をキレイにしていく。

『ふぅ。これでいいだろ？』ニヤ

《また便利な術を作ったのかナルト？》

（あぁ、落書きしているときから考えていたんだよ玉藻）

驚いているイルカに笑みを浮かべながら言い頭の中で玉藻と話す。

「ナ、ナルト…今のは何だ？」

『便利な術だろ？作ったんだ、先生』

イルカの問いに軽く答える。

「何でお前がそんなことできるんだ！？」

驚愕しているイルカにナルトが自分の腹を触りながら答える。

『…先生は俺の事は知ってるだろ？……九尾のこと』

「ナ、ナルト！！知っているのか…？」

また驚いているイルカにナルトが真実を告げる。

『知ってるさ自分の事だしな。大人達の目を見ていれば段々分かっ

てきたからな、それから俺は小さい時からずっと修行してきた。自分の身を護るためにな。それでさっきのような事ができるんだ』

《嘘じゃな》（そりゃ生まれた時から知っててずっと鍛えてきたとは言えないだろ！？）

玉藻のツッコミにナルトが言い訳を言う。

「そ、そうなのか？誰かその事を知っている人はいるのか？」

イルカが戸惑いながら言う。

『火影の爺ちゃんとあと俺を九尾と見ない数人は知ってるよ。まぁ誰にも言わないでくれよイルカ先生？先生は俺のことそういうふうに見ないから教えたんだからな？じゃあまた明日な先生！』

早口で言ったナルトは驚いているイルカに目もくれず帰って行った。

『ただいまー。出てこいよ玉藻』

イルカをほっておいて家に帰って来たナルトは玉藻に出てくるように言う。

《うむ》ボンッ《おかえりナルト》

出てきて自分に微笑みながらおかえりと言う玉藻を見てナルトが顔を赤くする。

『……ああ／／何か新婚みたいだな玉藻ハハッ』

こっちも恥ずかしくなるようなことを言うナルトに玉藻も顔を赤く

して言う。

《そうじゃな／／…それよりナルト、明日の試験どうするのじゃ？》

『うーん、どうしようかな？…わざと落ちてミズキに乗ってミズキで遊ぼうか？』ニヤ

《…不憫な奴じゃの》

一人頷いて危ないことを言っているナルトに玉藻はミズキに同情した。

《そんな事よりナルト早くご飯食べて風呂に入るぞ》

『わかった』

いつの間にかご飯を作っていた玉藻に言われてナルトは玉藻と食べ始めた。

『『いただきます』』

晩御飯を食べた二人は一緒に風呂に入ってきた。（二人は一緒に暮らし始めてからずっと二人で入っていたので慣れている）

『ふぅ～玉藻、もう寝よう？』

眠そうなナルトが玉藻に言う。

《そうじゃな、おやすみナルト。んっ》

『んっ、おやすみ玉藻』

一緒のベットに入った二人はキスをしてから眠りについた。

翌日ナルトは玉藻と一緒に卒業試験を受ける為にアカデミーに来ていた。

「卒業試験は分身の術にする。呼ばれた者は一人ずつ隣の教室に来るように」

イルカが卒業試験の説明をしているとナルトの中にいる玉藻がナルトに話しかけてきた。

《どうするのじゃナルト？》

『わざと失敗してミズキが接触してくるのを待ってミズキで遊ぶんだよ。ハハッ』

《…ミズキが哀れじゃのう》

ミズキを哀れんでいる玉藻にナルトが言い返す。

『欲が深い奴には良い薬だろ？』

《まぁそうじゃな…》

ナルトの番がきたので隣の教室に移動する。

「では始めろ」

ええっと…チャクラをわざと小さくして乱して……

【分身の術！】ボンッ

煙から出てきたのはフニャフニャになっているナルトの分身だった。

『……』

「……」

ナルトとイルカが沈黙していると、イルカが額に青筋を浮かべて怒鳴った。

「失格！！！」

「……彼は一応分身はできています。合格にしてあげても……あんなのボクにもできないし」

ナルトがミズキを冷めた目で見ているとイルカがナルトに疑惑の目を向けながら言い返す。

「ミズキ先生がなんと言おうとダメです！！皆三人には分身してる。しかしナルトの場合はたった一人…しかも足手まといを増やしているだけです。合格とは認められない」

（ナルトの奴どういう事だ……後で聞いてみるか）

結局不合格となったがナルトはのほほんと外のブランコに座って玉藻と話しながらミズキを待っていた。

《上手くいくのかナルト？》

少し心配して玉藻がナルトに言う。

『大丈夫だって玉藻。心配しなくてもどうせミズキは来るさ、こんなチャンスめったにないからな』

ナルトは自信を持って言い返した。
周りにはアカデミーの卒業生達が親に報告していた。その親たちがナルトに嫌悪の目を向けていた。

「ねぇあの子……」「例の子よ。一人だけ落ちたらしいわ！」「フン！！いい気味だわ……」「あんなのがが忍になったら大変よ」「だって本当はあの子…」「ちょっとそれより先は禁句よ」

そんな事を言っている大人たちを見てナルトと玉藻は呆れる。

『俺が生け贄になったくせに何言ってんだか…』

《アホばっかりじゃのう…八つ裂きにしてやろうかのう？》

ちょっと怒っている玉藻にナルトが慌てて止める。

『止めとけって、いちいち反応してたら里の奴ら全員皆殺しにしなきゃいけないだろ？あんなのほっといてミズキが来やすい所に行こう』
過激な事を言うナルトに怒っていた玉藻も怒りが消し飛んだのか冷や汗を流して答える。
《そ、そうじゃな》

その様子を見ていた火影が側にいるイルカに言う。
「イルカよ、後で話がある」「はい…」

原作通りにミズキがナルトに嘘を教えてからナルトは爺ちゃんのいる火影邸に向かった。
ガチャ
『入るぞ？爺ちゃん』
ナルトが返事を待たずに三代目とイルカのいる部屋に入ってくる。
「ノックくらいせんか…はぁ～、それで何か用かの？」
『あぁ、卒業試験わざと落ちたのは爺ちゃんもイルカ先生も分かってるだろ？何でか説明しに来たんだよ』
「なぜじゃ？ナルト」「何でわざと落ちたんだ！？」

疑問に思っていた三代目とイルカがナルトに理由を聞く。

『ミズキが前から怪しい動きをしてるのは知ってるだろ爺ちゃん？それで、俺が囮になって俺を利用するために接触してくるのを待っていたんだよ。』

その理由にイルカが驚いてナルトに聞いてきたのでナルトが軽く言い返す。

「何でそんな事したんだ！？」

『不穏分子を取り除くためだよ』

冷静に考えていた三代目がナルトに聞く。

「それでナルト。ミズキはお主に何て言ってきたのじゃ？」

『火影邸にある封印の書を持ってきたら卒業試験合格にしてやるって言ってきたよ』

「なっ！？なんだと！？」「ふむ…」

驚愕するイルカと三代目はどうするか考えていた。

「ナルト……ミズキは現行犯で捕らえねばならぬ。それでじゃ、お主の卒業試験は封印の書を持って行きミズキを捕らえる事じゃ。ゲンマとイビキを監視につける…それで見事捕らえれば合格じゃ」

そんなことを言う三代目にイルカが反論する。

「っ！？火影様！！」

「大丈夫じゃ。ナルトは強いからのぅ…お主はここで見ておれ。ナルト、どうじゃ？」

『それでいいよ爺ちゃん。大丈夫だってイルカ先生見ててよ』

三代目の問いにナルトが自信を持って頷く。

「ナルト…」

イルカが心配そうにナルトを見る。

三代目はナルトが頷いたのを見てゲンマとイビキを呼ぶ。

「ゲンマ！イビキ！聞いていたな？頼むぞ？」

呼ばれて出てきた二人が答える。

「「はっ」」

『久しぶりだね二人とも』

ナルトが二人に話しかける。

「おー久し振りだなナルト」

「久し振りだな坊主」

ゲンマとイビキがナルトに応えた。

それを見てイルカが三代目に質問する。

「火影様、あの二人は？」

「おぉ、あの二人はナルトのことを九尾として見ないからの。ナルトが小さいときから知っておるんじゃ」

『ねぇ爺ちゃんもうすぐ約束の時間だから行ってくるよ』

三代目とイルカが話しているところにナルトが時間だった入ってくる。

「そんな時間か、では大丈夫じゃろうが気を付けての」

『わかってるよ爺ちゃん。じゃあ、イルカ先生行ってくるから』

（玉藻、ミズキを虐めに行くぞ）《あやつは惨めじゃな》（いいんだよちょっとだし）

内心笑いながら玉藻と話すナルト。

「気を付けるんだぞナルト！」

「俺らがいるんだから大丈夫だ。じゃあ三代目行ってきますね」

「では三代目ミズキを捕まえてきます」

最後にゲンマとイビキが言い、三人はミズキを捕らえに行った。

そのあとはミズキがナルトに計画を話した所でナルトがミズキを殴り飛ばして遊んでからゲンマとイビキがミズキを捕らえて連れて行かれた。そして、ナルトは火影邸に戻り無事卒業試験は合格になった。

第三話（前書き）

今回は長いです。

第三話

翌日ナルトは合格者の説明会に来ていた。ナルトが欠伸をしながら玉藻に話しかける。

『朝からめんどくさいなー。ふぁ～。やっぱ、サスケとサクラと同じ班になるのかねぇ』

《まぁナルトは成績ドベじゃからのう。フフッ》

笑いながら言う玉藻にナルトが言い返す。

『まぁ、しょうがないだろ。テストとか怠いだけだしな。カカシは嫌だなー』

《何でじゃ？強いのじゃろう？》

玉藻が不思議そうに聞いてくるのでナルトが苦笑いしながら応える。

『あいつは平気で何時間も遅刻するんだよ。しかも毎日な、エロ本ばっか読んでるし』

《……まぁ儂は見ているだけだからのう》

『いいよなぁ玉藻』

ナルトが羨ましそうに言う。

二人が話している間に教室についた。

ガラッ

扉が開いた音に何人かがナルトに視線を向ける。ナルトは無視して席に着くとシカマルとチョウジが話しかけてきた。

「お…ナルト、お前落ちたんじゃなかったのか？」
シカマルの疑問にナルトが答える。
『あぁ、あの後特別試験を受けて合格したんだよ』
合格したというナルトにチョウジが嬉しそうに言う。
「よかったねナルト」
『ありがとなチョウジ。でも下忍なんてめんどくさいよな』
「ほんっとめんどくせー」
「二人ともいつもどおりだねー」
心底めんどくさそうなナルトと同意しているシカマルにチョウジがお菓子を食べながらののほんという。
そうやって話していると、サクラが話しかけてきた。
「ちょっとそこの席通してくれる！」
うわぁうるさいのが来たとナルトが思っていると……
「ナルトどけ！私はアンタの向こう側に座りたいのよ！」
サクラがナルトに怒鳴ってきた。
ナルトがサクラの言う方を見て納得した。サスケがいたからだ。すると、見られるのが嫌だったのかサスケがこちらを見て話しかけて

きた。

「なんだよ！」

『何でもない。ほら、退くから下がれ』

サスケが話しかけてきたので興味なさそうに返して、立ち上がってサクラに言う。

サクラはナルトに見向きもせず

「サスケくぅん！隣いい！？」

それを見てシカマルとチョウジがナルトを慰めた。

「災難だったな」「大丈夫？ナルト」

『分かってくれるのはお前らだけだ。でもあいつ等と同じ班になったらどうしよ』

ナルトが二人に感動して、仮定を言うと「頑張れよ」「頑張ってね」と慰めにもならないことを言われ、玉藻にも《まぁ苦労するのはナルトじゃからのぅ》と言われ肩を落とした。

そうしているとイルカ先生が来て説明会が始まった。

「今日から君たちはめでたく一人前の忍者になったわけだが…しかしまだまだ新米の下忍、本当に大変なのはこれからだ！」

「えー…これからの君達には、里から任務が与えられるわけだが。今後はスリーマンセルの班を作り…各班ごとに一人ずつ上忍の先生がつき、その指導のもとで任務をこなしていくことになる」

チィ…スリーマンセルか、足手まといが増えるだけだな…

絶対！！！サスケ君と一緒になるわよ！！

はぁ～めんどくさいな。楽な所がいいのに

ナルトは大丈夫かのぅ…

上からサスケ、サクラ、ナルト、玉藻だ。見事に全員バラバラだ。

「班は力のバランスが均等になるようこっちで決めた」

「「「「「えー！！！」」」」」

イルカの言葉に卒業生が一斉に文句を言い、順番にチームを言われていく。

「じゃ、次七班。春野サクラ…うちはサスケ…それと……うずまきナルト」

サスケと同じ班だと言うことにサクラが喜び、サスケは無反応。ナルトは自分の名が呼ばれると落ち込んだ。

『……勘弁してくれよ』ハァー

《ナルト、儂も一緒におるんじゃ大丈夫じゃ。元気を出すんじゃ！それにもうドベの演技もお終いじゃろう？》

玉藻の励ましにナルトは元気を取り戻した。

『そうだな！これから楽しめばいいんだよな』

そうやって二人で話していると…

「フン…せいぜいオレの足引っ張ってくれるなよ」

『……なぁ玉藻？事故って事にして殺して良いかな？なぁ？』

《お、落ち着けナルト。そんなガキはほうっておくのじゃ》

サスケの言葉にナルトから殺気が漏れ玉藻が慌てて鎮め、ナルトがサスケに寒気がするような無表情見下しながらで言い返す。

『本当のことも知らない哀れな悲劇のヒロインが…』

「サスケ君に何てこと言うのよ！！」

いつもと雰囲気が違うナルトと言葉に教室の空気が凍ったがサクラがキレて元に戻った。

そんなナルト達を見て、イルカは先行きが不安になった。

「じゃあみんな、午後から上忍の先生たちを紹介するからそれまで解散！」

その頃、ナルト達の担当上忍のカカシは三代目の所にいた。

「お主の班にはナルトと例のうちは一族のサスケもいるぞ、健闘を祈る！」

「了解」三代目に言われた班の内情を聞いて、大変なことになりそうだ…と冷や汗を流しながら応えた。

ほかの班が次々と担当上忍に呼ばれて行く中ナルト達第七班は今だに担当上忍が迎えにきておらず、ナルトは玉藻と頭の中で会話をしていた。

『やっぱり遅いねぇ』

《遅いのぅ、こんなに人を待たせよって何をしておるんじゃ？》

呆れたように言うナルトに玉藻も呆れて返す。いい加減待っているのも飽きたナルトが席を立ちドアの方へ向かっていき、ドアの上に黒板消しを仕掛ける。

「ちょっと！！何やってんのナルト！！」

ナルトに向かって怒鳴るサクラにサスケも目を向けた。

『アハハ、遅れてくる人が悪いんだよ』

「ったくもー！私！知らないからね！！」（こうゆーのけっこー好きなのよー！！）

「フン、上忍がそんなベタなブービートラップに引っかかるかよ」

開き直るナルトにサクラが注意し、サスケもバカにしたように言うがその間もトラップを次々と仕掛けていくナルトに二人とも冷や汗を流している。

そのときちょうど三人の担当上忍であるはたけカカシが入ってきた…

ガラッ
ボフ
「！」ボカァン！！！
黒板消しに付けた術式が起動し普通の起爆札を超える爆発が起きた。
「くっ！？どあぁ！！」カカシが煙で見えなくなるとナルトと玉藻が嬉しそうに笑う。

『アハハハハ！！やば、腹痛い！！ッククク』（見たか玉藻？）《クククッ見事に当たりおったのう。たが少し強すぎないか？》（いや、あれでも弱くしたぞ）《……》

「キャー！？先生？ごめんなさい、私は止めたんですがナルト君が…」（ＯＫ！ＯＫ！読み通りのベタなオチー！！）

「……（これで本当に上忍か？頼りなさそうな奴だな…）」

サクラが上辺だけ謝り、サスケは簡単に罠にかかるカカシに呆れているとカカシが起き上がってきた。

「んーお前等の第一印象はぁ…嫌いだ！！特に金髪の子！！（さっきのはいったい何なんだ！？）」

初っ端から嫌いだと言われて空気が重たくなったがナルトだけ笑顔のままカカシに近付いていきカカシと内緒話をする。

『まぁまぁ先生これあげるから機嫌直してよ。この世に一つしかないよ』

ナルトが大分前に自来也に貰ったサインをカカシに渡すとカカシがぷるぷる震えだしナルトに聞く。

「なにぃ！お前…こ…これは…」

『これあげるから許してよ先生？』

そうゆうナルトにカカシは満面の笑みを浮かべて言う。

「え？何言ってるのかな？全然怒ってないよ。さぁ自己紹介するから屋上に行くぞ」

「ねえ、何したのよ！？」「……」

たまらずサクラがナルトに聞く。サスケも聞きたそうにナルトに視線を向けた。

だがナルトは誤魔化して玉藻と二人また笑った。

『さぁな。フフッ』（うまくいったな玉藻）《そうじゃな。フフフッ》

四人は屋上で自己紹介を始めていた。

「それじゃあ…順番に自己紹介してもらおう」

「…どんなこと言えばいいの？」

何を言えば良いかわからずサクラがカカシに聞く。

「…そりゃあ好きなもの嫌いなもの…将来の夢とか趣味とか…ま！そんなのだ」

『じゃあ先生から初めてよ』

「そうね…見た目ちょっと怪しいし」

ナルトが言うとサクラもカカシに言う。

「あ……オレか？オレははたけカカシって名前だ、好き嫌いをお前らに教える気はない！将来の夢…って言われてもなぁ…ま！趣味は色々だ……」

「ねぇ…結局分かったの……名前だけじゃない？…」

そんなサクラの言うことも気にせず先に進ませるカカシ

「じゃ、次はお前らだ。右から順に…」

『名前はうずまきナルト。好きなものは玉藻。嫌いなものは大人と里の上役、将来の夢は楽しくゆっくり暮らすこと。あとは爺ちゃんの手伝いすること。趣味は悪戯っていうか人で遊ぶこと、あとは新術や術式の開発』《ナ、ナルト？／／》（ん？好きだよ？）《／／／／》

「「？」」

「……（里の大人か）新術？」

ほかの二人はなぜ大人が嫌いなのか分からなかったがカカシには分かり少し目を伏せ玉藻は好きという言葉に真っ赤になった。

『それは秘密だ』

「なるほどね…次！」

「名はうちはサスケ、嫌いなものならたくさんあるが好きなものはべつにない。それから…夢なんて言葉で終わらす気はないが、野望はある！一族の復興とある男を必ず…殺すことだ」（かっこいい…）
（イタチも可哀相な運命だなぁ）
（復讐など虚しいだけじゃ）
（……やはりな…）

『サスケって大変だね、一族の復興とか十数人は孕ませないといけないし、血を薄めないために近親相○もしなきゃダメだね』
「「……／／」」
場が沈黙する中一人頷いていたナルトにカカシがつっこむ。

「そうだけど、口に出したらダメだぞナルト」

「よし…じゃ、最後女の子……」

「私は春野サクラ。好きなものはぁ……ってゆーかあ、好きな人は…えーとぉ…将来の夢も言っちゃおうかなぁ…キャー！！」

「……」
カカシが呆れている。

「嫌いなものはナルトです」

『別に良いけど後で困るんだけど（こんなんで大丈夫か？）』《まぁこの小娘に期待しても無駄じゃろう》

「趣味はぁ…」

「（この年頃の女の子は…忍術より恋愛だな）よし！自己紹介はそ

こまでだ、明日から任務やるぞ」

『任務？何するの？』

分かっているがナルトがカカシに聞く。

「まずはこの四人だけであることをやる」

『何？』

「サバイバル演習だ」

『ふーん』

「……」

「何で任務で演習やんのよ？演習なら忍者学校でさんざんやったわよ！」

カカシの言葉に知っていたナルトは興味なさそうに言い、サスケは無言。サクラは文句を言った。

「相手はオレだがただの演習じゃない」

「「？」」

『それで？』

「……、ククク……」

「ちょっと！何がおかしいのよ先生！？」

「いや…ま！ただな……俺がこれ言ったらお前ら絶対引くから」

『……すでに引いてるんだけど？』

「……卒業生二十七名中下忍と認められる者はわずか九名。残りは再びアカデミーへ戻される。この演習は脱落率六十六％以上の超難関テストだ！」

『……（ねぇ玉藻、無視された）』《ナルト、元気出すのじゃ》（うん）

「……ヒク」「……」

「ハハハ、ホラ引いた。…ナルト、お前は驚いてないのか？」

あんまり驚いてなかったナルトにカカシが聞く。

『いや、アカデミー出ただけで忍者になったって死ぬだけだし。もっと忍者が増えてるだろ？』

「そういうことだ、卒業試験は下忍になる可能性のある者を選抜するだけだからな。とにかく明日は演習場でお前等の合否を判断する、忍び道具一式持って来い。それと朝飯はぬいてこい…吐くぞ！詳しいことはプリントに書いといたから明日遅れてこないよーに！」

『（めんどくさいな、こんなんじゃこいつら失格だな。まぁなんとかなるか。《それくらいいいじゃろ？明日から少しは力を出せるんじゃからな》うん少し楽しみだ）』

「吐くって！？そんなにキツイの！？（…けどこの試験に落ちたらサスケ君と離ればなれになっちゃう…これは愛の試練だわ！！）」

カカシからプリントを貰いながらナルトが心の中で玉藻と話していると
サクラが試験の厳しさに絶叫し、そのまま解散となった

次の日ナルトは玉藻としっかり朝ご飯を食べて二時間遅れて集合場所にきた。

『早いな二人とも、おはよ。』

「遅いわよナルト！」

「……フン」

サクラが文句を言ってきたので理由を言う。

『じゃあ初日に遅れてくる人がちゃんと時間通りに来ると思うか？』

「それは…」

身も蓋もないことをサクラに言いナルトは木の根本に座り込んで蛍火を出し、磨きながら心の中で玉藻と話し始めた。

『さて、どうゆう風に戦おうかな？』

《まぁあまり忍術は使わない方がいいじゃろうな》

『そうだな。使えるのは限られてくるか…まぁ中忍ぐらいの力で忍具や蛍火を使って戦うさ…ククク』

《…あんまりやりすぎるなよ？》

楽しそうに笑うナルトにカカシは大丈夫かと心配する玉藻だった。

「やー諸君おはよう！」

「おっそーい！！！」

『《はぁ～》』

遅れてきたカカシにサクラが怒鳴り、サスケは黙りナルトと玉藻は溜め息をついた。

「よし！１２時セットＯＫ！！」

「「？」」

『……』

いきなり話し出したカカシにサクラとサスケは疑問に思いナルトは沈黙していた。

「ここに鈴が二つある…これを俺から昼までに奪い取ることが課題だ。もし昼までにオレからスズを奪えなかった奴は昼飯抜き！あの丸太に縛りつけた上に目の前でオレが弁当を食うから」

ぎゅるるるるる

（朝飯食うなって…そうことだったのね）

『（食べてきてよかった）』

サクラとサスケの腹が鳴る。ナルトは食べてよかったと思った。

「スズは一人1つでいい。2つしかないから…必然的に一人丸太行きになる。…で！スズを取れない奴は任務失格ってことで失格だ！つまりこの中で最低でも一人は学校へ戻ってもらうことになるわけだ…」

「手裏剣も使っていいぞ。オレを殺すつもりで来ないと取れないからな」

「でも！！危ないわよ先生！！」

カカシに危ないと言うサクラにナルトが質問する。

『（本当に大丈夫かサクラ）なぁ、本当になんでもつかっていいのか？』

「…いいぞ」

「何言ってんのよナルト！？」

『上忍にまだ下忍にもなってない奴が勝てると思っているのか？』

そんなことを話す二人にサクラがまた甘いことを言うがナルトがサクラに言い返していると、突如ナルトの手首から先がぶれる。サクラに目を向けたまま自然な動作でクナイを投げたからだ。

「少し気が早いんじゃない？」

カカシの声を聞いたサクラとサスケがカカシの方に向くと、カカシの左手にクナイが握られていた。

『…あの二人に分からせるためだ。上忍の実力を過小評価しているからな』

そう言ったナルトに二人はカカシの左手にあるクナイはナルトが投げたものだと気付き驚いた。

―嘘…いつ投げたの？

―俺が気付つかなかっただと…？

「…今のタイミングで目線も向けずに投げられたら中忍でも厳しいぞ」

『それを掴む先生も流石だな』

「まぁね、でも殺気も出さずによく投げられるね」

『当たらないと思っているのに殺気なんて出さないよ』

「そうか…じゃあそろそろ始めるか。やっとオレを認めてくれたみたいだしな、ククク…やっとお前らを好きになれそうだ…」

「じゃ始めるぞ……よーい…スタート！！！」

ナルトとサスケとサクラは気を引き締めてスタートと同時に散っていった。カカシは少し考え込んでから歩き出した。

―少し油断していたか？だかナルトはドベだったはずだ。今のはそ

のドベにできるはずがない。気を引き締めないとな、スズを取られたら目標は達成できないし…ナルトの事も気になるからな。

「忍たる者―基本は気配を消しかくれるべし」
―よしみんなうまく隠れたな

カカシがイチャパラを読んでいるといきなりクナイ飛んできた。

「いきなり来たな（ナルトか…）」

それを横にずれて避けるがナルトがいつの間にか持っていた蛍火で切りかかる。

『はぁっ！』
ガキンッ
「くっ！？」
―重い…
ナルトの攻撃をクナイで受けたが予想外に重い斬撃にたまらず後ろに下がる。
ナルトはカカシと向き合った。

「……何で刀何て使ってるの？」

疑問に思ったカカシがナルトに聞く。

『結構楽しいからな…それよりもその本はしまった方がいいぞ？』

「うーん、どうして？」
読みながら聞いてきたカカシにナルトが簡単に答える。

『燃えるぞ？』ボウ…ゴオオオ

「「「っ！？」」」

ナルトが発した言葉と共に刃に炎が巻き付き刃を覆っていく。
その光景にカカシや隠れていたサスケとサクラが驚く。

―あれは性質変化か！？それにこの熱量は…
―何だあの炎は…なぜあのドベが
―何あの炎！？何でナルトがあんなことできんのよ！

『考えている暇があるのか？』

そんな中ナルトは気にせずカカシに火球を飛ばしていく。

「なっ！…そんなことまで！？」

『まだまだ行くぞ？』
ドゴオォォン！！
カカシは避けていくが今度は数十個の火球を飛ばしていく。
地面に火球が着弾し砂煙が辺りに立ちこめる。

「自分で視界をなくしたらダメでしょ？」
いつの間にかナルトの後ろに立ち首にクナイを突きつけていた。

『わざとにきまっているだろう？』ボン

「ぐぅっ！？」

ナルトが言葉を発した瞬間ナルトが突然爆発し、爆発するなど思っていなかったカカシは驚き一瞬避けるのが遅れて少し食らってしまった。

―ナルトの奴殺す気か！？殺す気で来いとは言ったが本当に来るとは…

『とった』

【灼爛炎帝】ゴオォ

カカシが避けた所にいきなりナルトが現れモノを燃やし尽くすような炎が蛍火から噴き出した。

「チィ」

『ふう、これも避けられたか…』

よく見ると燃えたモノは木片だった。

―くそっ何だあれは…あれがナルトだと？あいつ……

―嘘、嘘、何でナルトがあんなに強いの？ナルトはドベのはずなのに…私、大丈夫なの？

ナルトとカカシの戦いを見ていてサスケは自分よりはるかに強いナルトに嫉妬し焦った。サクラはずっと混乱していた。

「本当に殺す気かナルト？今のは変わり身使わなかったら死んでたぞ」

少し冷や汗を垂らしながらカカシは言う。

『このくらいじゃ死なないだろ？強くて嬉しいぞ…ククク』

実際ナルトは嬉しいのだ…強い奴と戦うのが久し振りだからだ。本当に嬉しそうなナルトにカカシが苦笑いしながら言う、しかし前半は軽くだが後半は真剣な表情で言う。「楽しそうだね、それよりナルトお前は何者だ？あんなの下忍にもなってない子供ができることじゃない。」

疑っているカカシにナルトが答える。

『九尾のことは知っているだろう？』

「っ！ああ」いきなり言われたことに驚いたがカカシは返事をする。

『いずれ命を狙われるのは分かっていたからな。俺はもっと小さいときから修行していた、自分の身を守るためにな。だがアカデミーに通うことになってドベのふりをすることにした、子供にしては強すぎるからな。それで襲われるのは面倒だ、追い払っても段々数は増えていき最終的には殺されるか皆殺しにするしか無くなるからな。本当に迷惑な事だ』

「ナルト……」

無表情で淡々と言うナルトにカカシは目を伏せ言葉が出ない。

『親父は俺を犠牲にして里を救い、里の英雄だと言ったが里の奴等は俺のことを化け狐と言う。俺は親父が守ったモノが汚く見える、本当に命を懸けて守るべきだったのか俺には判らない、それに九尾―玉藻が何故里を襲ったのかも考えない自分勝手な里の奴らが嫌いだ。

俺は先に丸太で待っている、このままじゃ意味ないからな。コレは返す』

ナルトは一方的に言いカカシにスズを投げ返して瞬身の術でその場から消えた。

「待てっ！！…くそ！」

呆然と話を聞いていたカカシはナルトが消えたのを見て周りを探すが見当たらないため悪態をついて考え込んでいた。

―ナルトは四代目が自分の父親だと気付いているのか！？

ドベのふりをしていた理由があんな理由だったとは思いもしなかった。

それに最後の里が嫌いとは……

カカシはナルトがそんなことを思っているとは思っていなかった。

もう一度ナルトと話さなければ…

丸太のところに来たナルトは玉藻と話していた。

『はぁ～やりすぎた…』

ナルトが頭を抱えていた。

《アホじゃな…じゃがさっきのは本当なのか？》

ずっと聞きたかったことを聞いた玉藻にナルトが溜め息をつき話す。

『はぁ～…半分ぐらいは本当だよ。強くなったのは生きていくためだし。里は嫌いというよりどうでもいいし、親父のこともほとんどそう思ってる。玉藻だって理由も無いのに今更里を襲う意味ないしねー。』

《そうか…すまんなナルト。儂が里を襲ったせいで》

『いいよそんなの、それに玉藻が居なかったら俺生きていけないからな。俺は玉藻が死ぬまでずっと一緒に居たいしな』

玉藻が申し訳なさそうに言うが、ナルトが寂しそうに言う。

《…儂でもいいのか？》

『ああ。それに人じゃなくなったから寿命はバカみたいに延びてるからな。玉藻が居なくなったら一人だ』

《っ！？ククク…そうじゃな》

ナルトがすでに人ではないことを忘れていた玉藻は笑って言い返した。

二人で談笑していると二回目のサクラの悲鳴が響いた。

『そろそろくるな。いろいろきかれるだろーな、はぁ～』

《頑張るんじゃな。フフ》

（帰ったらお仕置きだな。ニヤァ）

《っ！？す、すまぬ》

（ダメだ。逃がさないぞ？ククク）

《い、嫌じゃー》

玉藻で遊んでいるとカカシがやって来た。原作通りサスケを生き埋めにしてサクラは幻術を掛けられたみたいだ。

『…終わったのか？』

「…ああ、ナルトさっきの話は本当か？三代目は知っているのか？」

『まぁ、半分くらいはな。親父や九尾のことは本当にそう思っている。里の連中のことはどうでもいい、降りかかる火の粉は振り払うだけだ。それに俺のことを九尾と見ない人もいるからし、爺ちゃんたちの事は好きだからな、下忍にはなるさ。このままじゃ無理そうだが。』

「そうか…、この試験の答えを分かっているのか？」

ナルトの言葉に少し安心して、カカシはこの試験の答えを知っていそうなナルトに聞く。

『チームワークだろ？だけど今のあいつらには無理だ。サスケは俺たちを足手まといと思っているし、それにイタチを殺そうと躍起になってるしな。サクラはサスケしか見えていないサスケバカだしな。カカシは大変だなー』

「やっぱわかってたんだ。…でもナルトも十分大変なんだけどなー」

ナルトの容赦なく言うがカカシはナルトの方が大変だった。

そしてサスケとサクラがやって来てナルトを見てくるので詰め寄られる前にナルトが聞いてくるだろうと思っていたことを言って聞いてこないようにする。

『めんどくさかったからドベのふりをしていただけだ』

「はぁ〜」

二人を黙らせたナルトに何とも言えない顔をしたカカシが溜め息を吐き話し出す。

「で、この演習についてだが…ま！お前らはアカデミーに戻る必要もないな」

『……』

「（え？私…気絶してただけなんだけど…いいのかなあれで）」

―愛は勝つ！しゃーんなろ！！

「フン」

ナルトは沈黙して、サクラは疑問に思ったが良いことなので流し、サスケは当然だというふうな感じだったが、次のカカシの言葉にサクラとサスケは驚いた。ナルトは当たり前だと思い二人に呆れていた。

「…ナルト以外…忍者をやめろ！」

場が凍りついた。

「「！？」」

『……』

サスケ、サクラの顔が強張り、ナルトは無表情のままだった。それをカカシは笑顔を張り付けて無言で見ていた。「どういうこと！？…確かに鈴は取れなかったけど！何で忍者をやめろとまで言われなきゃいけないの！？それにナルトだけ何で！？」

サクラが半ばヒステリックに叫ぶ。

「何でって…どいつもこいつも忍者になる資格の無いガキだってことだよ…それにナルトは一人で鈴を取ったぞ」

カカシが表情を変えてわざと挑発するように言う。

それを聞いたサスケの体が少し震え、何かを耐えるように歯を食いしばる。

「ったく…何だ？優秀な奴が集まった班だて聞いていたが碌でもないガキばっかりで…使えるのはナルトだけか？」

ダンッ！！

サスケがその挑発に耐えきれなくなったのか地面を大きく蹴り、カカシに飛びかかる

『（キレると行動が直線的になる…子供だな）』

「サスケ君！！」サクラが叫ぶがカカシがサスケの左手を掴み地面に押しつけ顔を踏み、サスケの上に座った。

「だからガキだってんだ」

『はぁ～』

「サスケ君を踏むなんてダメー！！！」

「ぐっ」

「お前ら忍者なめてんのか…あ！？何の為に班ごとのチームに分けて演習やってるとおもってる」

叫ぶサクラとこちらを睨みつけるサスケを無視してカカシが話始める。

「え！？…どーゆーこと？」

「つまり……お前らはこの試験の答えをまるで理解していない……」

「だから…さっきからそれが聞きたいんです」

『…チームワークだ』

サクラがカカシに聞いたがナルトが先に答えを言った。それを聞いて三人がナルトに視線を向ける。

「何で鈴二つしかないのにチームワークなわけぇ？そんなのチームワークどころか仲間割れよ！」

そんなナルトにサクラが大きな声を上げる。カカシは静かにその様子を見ていた。

『わざとそうなるように仕組まれた試験だからな。大体下忍にもなってない奴が普通一人で取れる訳ないんだよ。俺が取れたのはカカシが取られるわけないと思い込み俺の実力が想定外だっただけだ』

「そうだ、オレもナルトの術が初めて見たもので驚いたからだ。こ

の試験は仕組まれた状況下でもなお、自分の利害に関係なくチームワークを優先できる者を選抜するのが目的だった。」

「ナルトは予想外だったが…
…サクラ…お前は目の前のナルトじゃなく、何処にいるかも分からないサスケのことばかり。
サスケ！お前は二人を足手まといと決めつけ個人プレイ。
任務は班で行う！確かに忍者にとって卓越した個人技能は必要だ。
が、それ以上に重要視されるのは“チームワーク”
チームワークを乱す個人プレイは仲間を危機に落とし入れ、殺すことになる…例えばだ…サクラ！ナルトを殺せ、さもないとサスケが死ぬぞ」

カカシがクナイをサスケの首に押しつけサクラに言う。

「！！」

「と…こうなる。人質に取られた挙げ句、無理な二択を迫られ殺される。
任務は命がけの仕事ばかりだ
お前らに最後のチャンスを与える。ただし昼からはもっと過酷な鈴取り合戦だ！挑戦したい奴だけ弁当を食え、ただしサスケには食わせるな。サスケは丸太に縛り付けておくからな。もし食べさせたらその時点で試験失格にする。ここではオレがルールだ、分かったな。
ナルトは食べたらかえっていいぞ」
―もし帰ったらしょうがないが失格にするしかないな…
カカシは内心そう思いサスケを縛って消えていった。

『…ふぅ、やっと行ったか』

ナルトはそう言うと弁当を持ってサスケの前に座る。
「…おい、何で俺の前に座るんだ？」
サスケはナルトを睨みながら言う。
『ここに座ったらダメなのか？』
「理由がねぇだろ、さっさと食って帰れ」
『理由なら有るぞ。サスケに俺が弁当を食べさせてやるからな。フフッ』
帰れと言うサスケにナルトが笑って言う。
「ちょ…ナルト！さっき先生が！！それに何でアンタがサスケ君に食べさせるのよ！？」
「そうだ！何で俺がお前に食べさせられなきゃなんねぇんだ」
サクラとサスケが文句を言ったがナルトは全く聞き入れない。
『先生が居ないんだからいいだろ？それに食べないと力がでないだろ、まぁ俺も男に食べさせるのは嫌だからな…』
「「？」」
いきなり印を組んでいくナルトに二人が疑問に思っているとはナルトが術を発動させた。
【転身の術】ボフン
「なにしやがんだ！」

煙が晴れて出てきたのはサスケの服を着た黒く長い髪の美少女だった。

『ふむ…ちゃんとできたな！』

「え…誰？……サスケ君？……ナルト！！あんたなにしたのよ！？」

「なっ！？何だこれ？」

ナルトは頷き満足していたがサクラがナルトに詰め寄ってきた。それを見てサスケも異変に気付き自分を見て驚いた。

『ん？サスケに女になって貰ったんだ、男に食べさせるのは嫌だからな』

「なんて事すんのよ！？」

「そうだ！！さっさと戻せ！」

『うるさい。別に少しの間なんだ、それにサスケは綺麗なんだからいいだろ？』

「…それは…まぁ……うふふ」

キレているサクラとサスケにナルトが首を傾げながら言うとサクラはぶつぶつ言いながら何か考え込んだ。笑い声が怖いが…

「ひっ！？何だ？悪寒が…それよりナルト！早く戻せ！」

何かにサスケが恐怖したがナルトにまた怒鳴る。

『そんなこと言っていいのか？クククッ俺が解こうとしないとずーっとそのままだが…まぁ俺はそのままの方がいいんだけどな。ほら、食べるぞ？』

「…食べたら戻せよ」

諦めたのかサスケはふてくされように言った。

『はいはい、ほらあーん』

ナルトがご飯をサスケの口元に持って行く。

「くっ、あ…あーん／／」

『ククッ可愛いなサスケ。女のほうがいいんじゃないか？』

「う、うるさい／／」

―何してんだあいつら…ま！サクラは何かぶつぶつ言ってるが合格にしていいか…

隠れて様子を見ているカカシはそう考えて出て行った。

ボン！！！

「お前らあぁあ！！」

『……』

「！」

「な！？何？」

急に煙を撒き散らし叫びながら走ってくるカカシにナルトはキレて、サスケと妄想していたサクラは驚いた。

「ごーかっく！」

「え！？……」

『はぁ～』

「……」

ハートマークがつきそうなカカシの笑顔にサクラは驚きナルトは溜め息を吐いた、サスケは無言でカカシを睨んでいた。

「合格！？なんで！？」

「お前らが初めてだ。今までの奴らは素直にオレの言うことを聞くだけのボンクラどもばかりだったからな……忍者は裏の裏を読むべし。忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされる。……けどな！仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだ！」

「アハ…」

「フン」

『……（まぁなんとかなったな）』

カカシの言葉にサクラは喜び、サスケは鼻で笑う。ナルトは黙っていたが内心安堵していた。

「これにて演習終わり。全員合格！！よォーしィ！第七班は明日より任務開始だァ！！！」

『よし帰るか』

カカシの解散の言葉にナルトは早速帰ろうとするが…

「何帰ろうとしてんだ！！さっさと元に戻せ！」

『ん？』

サクラに縄をはずしてもらったサスケが怒鳴った。
サスケを不思議に思っていたカカシがナルトに聞く。

「ねぇナルト、サスケに何の術かけたの？」

『あぁ、これは体と体の機能全てを女性化する術だ。因みに妊娠も出来るぞ、そのかわりに生理もあるが。精神まで完全に女になったら完成だな。まぁサスケみたいなのはそのままの精神の方が楽しめそうだがな。フフッ』

「……」

ニヤリと口を歪めながら答えるナルトにカカシは冷や汗がタラタラ垂れてきた。

「な、何を言ってんだよ！？早く戻せ！」

「そうよ！早く戻しなさいナルト！」
冗談じゃないことを言うナルトにサスケとサクラが詰め寄ってきた。
サスケは少し涙目だが…
『…サスケ、涙目のまま上目遣いで怒鳴ってきても可愛いだけだぞ？むしろもっと虐めたくなってくる。
…サクラ、あの無表情なサスケが可愛らしくなって自分をお姉ちゃんと呼んでくるのを想像してみろ。』
「くっ／／」
「お、お姉ちゃん／／……いい…いいわ！」
サスケは何だか急に恥ずかしくなってきて顔を真っ赤にし、サクラはそんなサスケを妄想して鼻血を垂らしていた。
―ナルトの奴扱い方が巧いな…
パンパン
「はい！もうその話はおしまい！ナルトは術を解きなさい。サクラは鼻血を拭け！いい加減帰るぞ」
その様子を見ていたカカシが注意をし、サスケとサクラの様子が落ち着いてからナルトが術を解く。
『しょうがないな…解！……今度カカシには完成版をしてやる。
ボソッ』
「ビクッ！？それじゃあ帰るぞ！」
そうやって四人はやっと解散していった。

（よし、帰ったら玉藻のお仕置きだな！ニヤ）（なっ！？覚えておったのか？）
（当たり前だ。話していなかった時にナニをするか考えていたからな）
（な、何をするつもりじゃ？）
（ククククッ帰ってからのお楽しみだ）
（ひぃっ嫌じゃあぁ！）
（ダ・メ・だ！フフッ楽しみだ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3607k/

NARUTO 転生物語

2010年10月9日16時35分発行